

個人と集団の狭間で

『アポカリプス』(by D.H.Lawrence)の現代的意義

田部 井 世 志 子

要旨： 「個人は愛し合えない。」D・H・ロレンスは『アポカリプス』の中でこのような現代における個人の愛の不毛性の問題を世に投げかけてこの世を去った。われわれは彼のこの言葉をどう受け止めればいいのか。おそらく人類が始まって以来、常に振り子のように揺れてきた人間存在の在り方 個人重視か集団重視か についての議論を加えつつ、とりわけ個人主義が標榜される今日にあって、今一度真摯にロレンスの問題提起に耳を傾け、問題解決の一助 宇宙的大自然との一体化のうちに個人どうしの愛の可能性を見る を彼の『アポカリプス』の中に探る。

キーワード： 個人(主義)、集団(主義)、愛の不毛性

はじめに . 現代社会における愛の不毛性

今日、新聞やテレビの報道を見聞きするにつけ、様々な人間の不幸が取り沙汰されている。しかもその中で特に目を引くのは、人と人との関係性の欠如、愛情の欠如、といった、人間関係の不毛性に起因している不幸であり、その数の多さには驚かされる。一つひとつの不幸をことさら取り挙げるのは、あまりにも冗長であろう。日本人は、人類はどうなってしまったのか。この先、人間社会はどのようになっていくのだろうか。

ニュースで取り上げられる事件などは、その取り上げ方があまりにセンセーショナルで、また、そのようなことばかりがこの世で起こっている、といった極端な印象を与えてしまっているという事実は忘れてはならない。実際以前はニュースとして話題にならなかったような地域のニュースまでもがネットワークの広がりの中で全国津々浦々にまで流れ、情報量が圧倒的に多くなっている。また、マスコミの情報操作の可能性、すなわち、面白おかしく、視聴率を上げるための作為的な情報操作の可能性を決して見逃してはならないだろう。

しかし、それを踏まえた上でも、昨今の社会状況の変化(情報化、消費経済、核家族化、「地

域」の消滅等)を考慮に入れ、実際に身近なところを見回すと、近年の日本社会の危うさ、不安定さは、より現実のものとなる。そこには人間関係の希薄化、お互いの意思疎通のなさ等の問題が横たわっているだろう。更に大きな概念でD・H・ロレンス流にいうならば、それは人間間の愛の不毛性ということになるかもしれない。

ロレンスは、聖書の「黙示録」¹を論じた『アポカリプス』(*Apocalypse*)の中で、「現代人ははたして他者を愛しうるか、個人と個人とはいかにして結びつきえようか」(福田 14)という問題提起を行なった。そして「個人はついに愛することができない」という最終的なメッセージを人生のまさに末期に世に放った。以下に引用してみよう。

So that we see, what our age has proved to its astonishment and dismay, that the individual *cannot* love. The individual cannot love: let that be an axiom. And the modern man or woman cannot conceive of himself, herself, save as an individual. . . . The Christian *dare not love*: for love kills that which is Christian, democratic, and modern, the individual. The individual cannot love. When the individual loves, he ceases to be purely individual. And so he *must* recover himself, and cease to love. It is one of the most amazing lessons of our day: that the individual, the Christian, the democrat cannot love. (123-4; underline mine)

興味深いのは、ロレンスがこのように愛の不毛性の問題を、とりわけ「個人」の問題と絡めて論を進めている点である。そこで本稿では、以下『アポカリプス』を中心に取り上げ、この問題を、個人(主義)とその対極である集団(主義)といった視点で考察を加えることで、ロレンスの問題提起に新たな光を当て、現代社会におけるロレンスの意義を問い直してみたい。

愛の不毛性といえば、筆者はこれまで例えば「D・H・ロレンスのポスト・フェミニズム的意義」と題して、『アポカリプス』におけるロレンスの問題提起を男女間の愛の不毛性の問題として取り上げ、ポスト・フェミニズムの視点から論じたことがある。²しかし実は『アポカリプス』の醍醐味は、男女間のいわゆる性愛の問題に限定することなく、むしろ全人類の関係性の問題として、それを捉えている点にある。³それにしても、なぜロレンスは「個人」は愛せないと、とりわけ個人、あるいは個人主義を問題視するのだろうか。

今日ほど個人主義が標榜され、もてはやされる時代はかつてなかっただろう。ロレンスの時代においてもそのような世相はあっただろうし、また何よりもロレンス自身が個人の重要さ、かけがえのなさを次のように論じていた。

Here then is the new ideal for society: not that all men are equal, but that each man is himself: "one is one and all alone and ever more shall be so." (EP 603)

個人と集団の狭間で

また、「デモクラシー」(“ Democracy ”)にも同様の主張がうかがえる。

Every single living creature is a single creative unit, a unique, incommutable self. (708)

このような個人観を持ちつつも、ロレンスは先に挙げたように『アポカリプス』の中であえて「個人主義的」なキリスト教徒や民主主義者を弾劾してゆく。我々はその言葉をどのように受け取ればよいのだろうか。そもそも現代の個人主義は万能といえるのだろうか。個人主義が社会に生きる我々にとって本当に福音となるのか。個人主義と人間の在り方について根本的に問い直す必要はないのだろうか。こういった問題に対して真っ向から立ち向かった作家がロレンスであった。

個人あるいは個人主義と、愛の問題を考えるにあたり、「愛は、キリスト教的なもの、民主主義的なもの、近代的なものを、要するに個人を殺してしまう」という、先のロレンスの言葉を手がかりに、愛が「殺してしまう個人」、つまり「キリスト教的なもの」「民主主義的なもの、近代的なもの」の問題について考えてみたい。以下、ロレンスの論を追ってみよう。

1 . キリスト教における個人と集団

まずキリスト教との関連で個人と集団の問題について考察を加えてみよう。内容に踏み込む前に、ロレンスにとって聖書の「黙示録」がいかなる存在であったのかを確認しておくことは無駄ではないだろう。

実は「黙示録」は一人の手になった作品ではなく、また一世紀にして完成されたものでもない(*cf. Apocalypse 39*)。パトモスのヨハネ⁴ が手を加える前に既に異教的なものとして存在していたものに、多くの人たちが手を加えてようやく出来上がったという経緯があるのだ。

John of Patmos didn't *compose* the Apocalypse. The Apocalypse is the work of no one man. The Apocalypse began probably two centuries before Christ, as some small book, perhaps, of Pagan ritual, or some small pagan-Jewish Apocalypse written in symbols. It was written over by other Jewish apocalyptists, and finally came down to John of Patmos. He turned it more or less, rather less than more, into a Christian allegory. And later scribes trimmed up his work. (DA 295)

このような経緯があるために、『アポカリプス』の中でも述べられているように、「黙示録」には「異教的な中核部分」(56)が多く残存しているのだ。変遷を経た「黙示録」を何度も読ん

だロレンスは、それに対し「どうしようもない嫌悪感」を感じ、それを「おそらく、聖書中もっとも嫌忌すべき篇」と結論づけているわけだが（*cf.* 5）ここで注目すべきは、ロレンスの嫌悪感がどこに由来しているのかという点である。

パトモスのヨハネが「黙示録」に手を加えた時、異教的な象徴についてはそのままにしておいたわけだが、その後「真のキリスト教徒たち」が作業に取りかかった。ロレンスが忌避するのは、まさにその部分なのである。⁵

... after John had done with it, the real Christians started in. And that we really resent. The Christian fear of the pagan outlook has damaged the whole consciousness of man. The one fixed attitude of Christianity towards the pagan religious vision has been an attitude of stupid denial, denial that there was anything in the pagans at all, except bestiality. . . .

This is what happened to the Apocalypse after John left it. . . . And all to cover up the pagan traces, and make this plainly unchristian work passably Christian.

We cannot help hating the Christian *fear* whose method, from the very beginning, has been to deny everything that didn't fit: or better still, suppress it. (41-2)

要するにロレンスが嫌悪を催すのは、「黙示録」の後半部分の底流をなしている「キリスト教的恐怖感」、あるいは異教的なものを否定するキリスト教の「独善、自惚れ、自尊、秘められたる羨望嫉視」（118）に対してなのである。以上のようなキリスト教の「けちくさい個人的救済、けちくさい道德」（26）といった要素とは全く異なる要素、「黙示録」の前半に主に見出せる異教的また象徴的な要素については、ロレンスは好感を抱いているという事実を忘れてはならない（*cf.* 倉持 281）。

The discrepancy of the two intentions is the first thing that strikes us. The first part, briefer, more condensed or abbreviated, is much more difficult and complicated than the second part, and the feeling in it is much more dramatic, yet more universal and significant. We feel in the first part, we know not why, the space and pageantry of the pagan world. In the second part is the individual frenzy of those early Christians, rather like the frenzies of chapel people and revivalists today.

Then again, we feel that in the first part we are in touch with great old symbols, that take us far back into time, into the pagan vistas. (33)

パトモスのヨハネが異教的要素を大いに含む象徴にまでは手をつけなかったことから、彼に好意をさえ示すロレンスであった。

個人と集団の狭間で

... it is his [John's] curious fervid intensity which gives to Revelation its lurid power. And we cannot help liking him for leaving the great symbols on the whole intact. (41)

以上見てきたように、「疑いなく複数の若者、それも違った世代、それどころか世紀をまたがった著者の手になる」(DA 295)「黙示録」に対してロレンスは、嫌悪を抱くと同時に魅了されるという二律背反的な複雑感情を抱くことになる。

さて、「黙示録」の異教的な部分とキリスト教的な部分には、人間存在の捉え方 個人として、あるいは集団として に重要な相違があることに着目しよう。ロレンスはイエスを「純粋に個人を保てる」存在、他者との「ふれあい」を求めず、孤独を身に引き受けることができる存在 (cf. *Apocalypse* 19) と捉えている。そのような「強者」イエスは、「大いなる優しさ、穏和と没我の精神、強さからくる優しさと穏和の精神」(11) を持ち、「諦念と愛」(12)、あるいは「利他的な同胞愛」(19) を教える。このように、自らが「個人」を持することのできるイエスは、愛こそが大事だと説く。

しかし他方で「黙示録」は、欲を持ち権力を求める集団的存在である「弱者」の存在を知らしめる。ロレンスが経験した炭坑夫たちの家庭を支配しているのは、果たして「強者」の提示しうる「愛」ではなく「権力意識」だった。

The home was rough yet not unpleasant, and there was an odd sense of wild mystery or power about, as if the chapel men really had some dispensation of rude power from above. Not love, but a rough and rather wild, somewhat 'special' sense of power. (*Apocalypse* 10)

人間には精神に関わって二つの型 「己の魂の強さを感じている人間と、逆に己が弱さを感じている人々」(11) があるが、「第二流の人々」(14) である「弱者」の方が常に多数であるとロレンスはいふ。そのような「弱者」が果たしてイエスの教えに応えることができるのだろうか。ロレンスはこの問に対して否を突きつける。イエスの説く愛は、「個人」を持した「強者のみが知る心境」(19) でしかなく、「弱い」人間たちは簡単には諦念と愛の境地に入ることができない。新約聖書が人間は弱いという事実、つまり人間が他者との権力構造を求めざるをえない「弱い存在」であるという事実を無視したものであるからには、「イエスが己の弟子のうちにイスカリオテのユダをもたねばならぬ宿命にあった」のと同様、その中に「黙示録」が忍び込んだのも無理はないとロレンスは考える。

For Revelation, be it said once and for all, is the revelation of the undying will-to-power in man, and its sanctification, its final triumph. . . .

This is the message of Revelation.

And just as inevitably as Jesus had to have a Judas Iscariot among his disciples, so did there have to be a Revelation in the New Testament. (16)

それほどまでに「人間の本性」「集団としての人間の本性」が「権力への絶えることのない意志を要求しているから」である。イエスのキリスト教精神、つまり、「諦念と瞑想と自己認識の宗教」は「ただ個人のためのもの」であり、それは「我々の本性のわずかに一部を満足させるのみ」なのだ。「人は己の本性のほんの一部においてのみ個人たりうる」のであり、「他の大きな領域においては集団である」のだ (cf. 15)。⁶

The Christianity of Jesus applies to a part of our nature only. There is a big part to which it does not apply. And to this part, as the Salvation Army will show you, Revelation does apply.

The religions of renunciation, meditation, and self-knowledge are for individuals alone. But man is individual only in part of his nature. In another great part of him, he is collective.

... The lowest stratum of society is always non-individual, so look there for the other manifestation of religion. (15)

こうしてロレンスは、人間はすべて「自我の深層部においては……集団的たることを免れない」(17)ということは何度も繰り返すことになる。孤独に耐え、自己を保ちつつも他者との相愛を主張することができるのは、イエスやパウロのような「強者」のみであり、自我の深層部において「集団的」な存在である多くの人間は、愛よりもむしろ権力構造を志向せざるをえないのである (cf. 11)。⁷

集団性を否認しない人間存在が個人になることだけを徒に志向するとどうということになるのか。ロレンスは、その誤謬を以下のように指摘する。

Because, as a matter of fact, when you start to teach individual self-realization to the great masses of people, who when all is said and done are only *fragmentary* beings, incapable of whole individuality, you end by making them all envious, grudging, spiteful creatures. . . . But if they make efforts at individual fulfillment, they *must fail* for they are by nature fragmentary. Then, failures, having no wholeness anywhere, they fall into envy and spite. (120)

人間は「完全な個人にはなれない」からには、また、人間が「ことごとく断片的な存在」になってしまっているからには、「その個人の成就を試み」ても、「きっとそこにつまずきをみて」、「嫉妬と妄執の鬼と化す」しかない。集団的な全体性を否定し、バラバラの存在になっているからには、人間は失敗せざるをえないというわけである。

さて、ここに至って、キリスト教徒の完全主義の誤謬も見えてくる。ロレンスは「救われた

る者」として「完全性」を誇るキリスト教徒を傲慢と見なし、また「個人化」された姿と見る (*Apocalypse* 113)。つまり、人間はあくまで全体の中の一部に過ぎないにもかかわらず、自らを一つの完成品とみなしてしまうと、もはや変化を求めない固定化した存在になってしまい、そうになるとやはり、ただの断片と化さざるをえない。また、そのような存在には愛も求め得ないのだ。変化を求めない状況がいかにロレンスにとっては厭わしいものであったかは、次の引用にも明らかである。

All things flow and change, and even change is not absolute. . . .

. . . If the one I love remains unchanged and unchanging, I shall cease to love her. It is only because she changes and startles me into change and defies my inertia, and is herself staggered in her inertia by my changing, that I can continue to love her. If she stayed put, I might as well love the pepper-pot.

. . . If I say of myself, I am this, I am that!—then, if I stick to it, I turn into a stupid fixed thing like a lamp-post. I shall never know wherein lies my integrity, my individuality, my me. I *can* never know it. It is useless to talk about my ego. That only means that I have made up an *idea* of myself, and that I am trying to cut myself out to pattern. Which is no good. (WNM 536-37)

以上見てきた通り、ロレンスによれば人間は本質的に集団性を具えた存在であり、その本質を無視して徒に他者との愛による関係性を築くことは困難なことなのだ。また、イエスに従って個人主義を唱え、愛を目指したとしても、自己の完全性を誇るだけの結果に終わり、むしろ人間は孤立したバラバラの断片になってしまい、他者との関係性を望むべくもないという。キリスト教的個人化は、本来の意味での個人化ではなく断片化というべきものであろう。それはロレンスの求めていた人間のあるべき姿ではない。

では、デモクラシーにおいて個人は断片化を免れ、個人のあるべき姿を求め、そして更にはそのような個人同士の愛ともいうべき関係性が築けるのだろうか。次章では、『アポカリプス』の中でロレンスが今一つ弾劾の対象としているデモクラシーについて、個人との関連で考察を加えてみよう。

2. デモクラシーと個人主義

個人と集団の問題は難しい。個人主義と集団主義の問題に正面から挑戦し、それぞれのパターンがどのように作用し合うのかという問題について様々な角度から、しかも多くの国々の例を挙げながら論じた社会心理学者H・C・トリアンディスは、『個人主義と集団主義』の中で、大

局的に見ると「豊かになり、マスメディアへの接触が増え、現代化してゆくと、人は個人主義へと転換してゆく可能性がある」(87)と論じており、実際今日、個人主義社会が世界中で増えつつあるのは事実である。⁸ 因みに農村社会で成り立ってきた日本社会も「西欧市民社会と比較して個人主義の確立はまだ未成熟であるが」、戦後その影響を受け「個人主義志向が強まったことは確か」である (cf. 石見 9)。とはいうものの、現在でも集団や社会が優先され、個人がないがしろにされる社会が存在するのは事実である。だからこそ「人間すべてが平等、公平に扱われ、物事の決定に関わる権利を有する」体制であるデモクラシーが望まれ、また、集団よりも個人を重んじる個人主義を標榜することの重要性が、今日にあって主張されるのだ。

しかしここで、誤解を招かないためにあえて付言する必要があるのは、ロレンスが例えばデモクラシーを論じる際、彼の関心はその政治的、社会的な制度や体制「個人の人権の保証、社会における多文化主義の可能性、民主的な社会体系、犯罪の制裁が集団の連帯責任ではなく加害者本人のみとすること、進歩や技術革新の歓迎、個人の創造性、自由、高度な技術修得、および達成の強調」(トリアンディス 186) ではなく、あくまで個人の内面、存在の在り様としてのデモクラシーに在るという点である。ロレンスの議論はあくまで「人間精神の二つの型」(Apocalypse 11) 個人的か集団的かといった、人間存在そのものの本質論であるということをご断っておきたい。⁹

デモクラシー思想のもとでは、人間は個人を保てるのだろうか。以下、デモクラシーにかかわるロレンスの議論を追ってみよう。『アポカリプス』を書く以前に執筆した「デモクラシー」(“Democracy”)の中に詳しいので、それから主に取り出してみる。

ロレンスはデモクラシーを論じるにあたり、まずホイットマンのいう「デモクラシーに必要な法則、もしくは原理」を二つ (1) 平均人の法則 (2) 個人主義、人格主義、またはアイデンティティの原理 に要約し、とりわけ「個人主義」の項目の中で、独自のデモクラシー論を展開していく。ホイットマンのデモクラシー論によって「分裂した感情を抱かせられ、煙に巻かれそうになりつつも」(cf. “Democracy” 709) ホイットマンがデモクラシーを「新たな価値観を確立し」各人が「自分自身になる」という欲求を満たすための「試み」と捉える限りはそれを認め、彼のいうデモクラシーを支持する。

It is obvious that Whitman's Democracy is not merely a political system, or a system of government — or even a social system. It is an attempt to conceive a new way of life, to establish new values. . . .

. . . The great *desire* is that each single individual shall be incommutably himself, spontaneous and single, that he shall not in any way be reduced to a term, a unit of any Whole. (713)

ロレンスにとって「我々のデモクラシー」(709)の目的は、「人間一人ひとりが自発的に自分自身になるということ」、「男も女もそれぞれ自分自身になること」(716)つまり、アイデン

個人と集団の狭間で

ティティを各自が持つことにこそある。しかもロレンスによれば、確固としたアイデンティティを持つ「個人」こそが、お互いに愛し合えるのである。この点に関連して、とりわけ男女の愛についてロレンスは「トマス・ハーディ研究」(STH(“ Study of Thomas Hardy ”))の中で次のように語っていた。

In Love, in the act of love, that which is mixed in me becomes pure, that which is female in me is given to the female, that which is male in her draws into me, I am complete, I am pure male, she is pure female; we rejoice in contact perfect and naked and clear, singled out unto ourselves, and given the surpassing freedom. No longer we see through a glass, darkly. For she is she, and I am I
(468)¹⁰

両者それぞれが単独のアイデンティティを持ってこそ愛し合えるという、ロレンス独自の「星の均衡」、あるいは「二者にして一者」(two in one)の概念である。我々はこの概念が、男女間の愛にとどまらず、より大きな人類愛に繋がることを知っている。人が人を愛するためには、お互いがそれぞれの個性を保ち、同時に他者の存在を認める必要があるのだ。一方が他方を所有し支配する関係、あるいは一方が他方に溶け込み、自己を見失ってしまうような関係においては、本来の愛は育ちようがないのである。

しかしロレンスは一方でデモクラシーを痛烈に批判する。一体何が問題なのだろうか。まず一つ目の「平均人」についての項目で、どうして「平均人」の概念が生じたのか、その理由を次のように説明している。

Society means people living together. People *must* live together. And to live together, they must have some Standard, some *Material* Standard. This is where the Average comes in. (“Democracy” 701)

このような「平均人」に近代デモクラシーも拠っているのであり、社会とは「平均人」を作り上げるために存在するのであり、「個人」のために存在するわけではないと指摘する。

And this is where Socialism and Modern Democracy come in. For Democracy and Socialism rest upon the Equality of Man, which is the Average. And this is sound enough, so long as the Average represents the real basic material needs of mankind: basic material needs: we insist and insist again. For Society, or Democracy, or any Political State or Community exists not for the sake of the individual, nor should ever exist for the sake of the individual,

but simply to establish the Average, in order to make living together possible
(“Democracy” 701)

結局デモクラシーの名のもとに、人間は「平均人」という「純然たる抽象概念」(699)に過ぎないものに振り回されることになる。「手段を目的と誤解してしまった」(702)のである。理想主義のもとで「平均人」を作り上げ、それを求めることで、個人が集団の中に埋没してしまっているのだ。

「人格性」についてはどうだろうか。まず、ロレンスが「人格」(person)と「個人」(individual)という二つの単語の語源比較から両者の相違を明確化している点は非常に興味深い。すなわち、「人格」は「ペルソナ」(persona「役者の仮面、あるいは芝居の登場人物」(710))から由来し、また、「個人」が「分割できないもの」という意味を本来持っていることを指摘することで、彼は「人格性は個人性よりもはるかに表面的なもの、少なくとも一時的なもの」に過ぎず、それを「観念的(ideal)な自己」(711)だと説明する。そして今日、「理想主義(idealism)」こそが「本当の敵」であり、「この敵が具体的に何かを見たいのなら、それはまさしく人格性だ」(711)ともいう。その理由は、「観念」に過ぎない理想を振りかざし、人は本来の個人性の上にペルソナを被ろうとするからである。そしてロレンスは、「我々のデモクラシー」には「人格性などはない。理想もない。……人間の自己は、自己そのものにとって法なのであって、人格としてのその人にとって法なのではない」(712)と高らかに宣言するに至る。まさに「個人」を重視するロレンスの面目躍如たる所以である。

最後にロレンスは「アイデンティティ」についても同様の議論を続ける。ホイットマンのいう「万物には同一なるアイデンティティがある」(705)という言説に端を発し、ロレンスはそのアイディア「万物は至高者から流出する。万物は至高者から流出したものであるゆえに、同一なるアイデンティティを有する」(706) に対し、「理論的にはまことにけっこうだ」といいつつも、そのような「同一なるアイデンティティ」は、「真のアイデンティティ」¹¹ではないのではないかと疑問を差しはさむ。むしろもう一つ別の「ささやかなアイデンティティ」があり、それこそが「自分自身」であると主張するのである。

There is another, little sort of identity, which you can't get away from, except by breaking your neck. The One Identity is very like the Average. It is what you are when you aren't yourself. (706)

このような「真のアイデンティティ」を無に帰してしまうのが「同一なるアイデンティティ」あるいは「大衆行動」であり、「社会的活動、公的存在、自己の判断の普遍化、共和主義、ボルシェヴィズム、社会主義、帝国といったもの」である。これらすべては「大衆つまり同一なるアイデンティティが気遣いじみた形で現われたもの」であり、そのようなものに熱狂するのはやめにしようとしてロレンスは呼びかけるのだった (cf. 709)。

ロレンスがデモクラシーに潜む物質主義的、拝金主義的要素に眼を向けている点も忘れてはならないだろう (cf. 715)。¹² 彼によれば「近代デモクラシーの現実」(717)は、「あらゆる

主義を支配している唯一の原理」つまり「人間を財産所有者という観念化された単位として見る物質主義」に基づいており、結局は人間が民主シーを墮落させてしまっているという。

以上のような議論を通して浮かび上がってくるのは、結局民主シーの名のもとでは、平均人、人格性、同一なるアイデンティティといった、人間が作った観念や理想により人間自らが抽象化され均一化され、「機能を有する機械的な単位」に変えられてしまっているというロレンスの問題意識である。これこそが皆の誉めそやす人類のあらゆる偉大な理想　民主シー　の実体なのだ。本来人間の唯一の目的は「自身の生を最高度に生きること」(714)であるにもかかわらず、人間は理想のために、「観念的に機能する単位の集団」(705)になり下がってしまい、各単位がそれぞれ自らを「完全」と思い込み袋小路に陥っている。『アポカリプス』の中でも次のように述べている。

But a democracy is bound in the end to be obscene, for it is composed of myriad disunited fragments, each fragment assuming to itself a false wholeness, a false individuality. Modern democracy is made up of millions of frictional parts all asserting their own wholeness. (123)

本来民主シーは人類が求めるべきものなのかもしれない。その概念のもとにあって、人は自己の「個人性」を活かせるはずではなかったのか。にもかかわらず様々な要因　平等主義、理想主義、物質主義、拝金主義等　のために、人間は「墮落し」(“ Democracy ” 715)、ロレンスの考える本来の民主シーの姿を忘れ、自らのアイデンティティを喪失し、また自己を「完全な存在」であると勘違いしてしまうことで各人が断片と化しているのである。「これほど個人主義的な時代である」にもかかわらず、「安っぽい人気取り的な」(“ Aristocracy ” 479)民主シーのもとで、むしろ個人が存在しづらくなっているのだ。¹³ このままでは、近代民主シーをもってしても、人間は関係性を築けるような個人にはなれない。ロレンスのいう通り、我々の個人主義とは所詮、「幻想」(126)に過ぎないのだろうか。

3. 個人が集団が　第3の道

ロレンスが最終的に到達した結論　「個人は愛することができない」　から我々は、人間が個人化しても愛を育めないのであれば、いっそのこと愛を諦めよ、というメッセージを読み取るべきなのだろうか。あるいは、愛を成就するために個人を捨て、むしろ集団性に戻れというのだろうか。「単独であり、創造力を具えた一個の単位であり、かけがえのない唯一の自己」(“ Democracy ” 708)に執着を見せるロレンスが、「個人」をそう簡単に諦めたとは考

えられない。これは二者択一の問題なのだろうか。

まず、ロレンスが本来のデモクラシー、本来の集団性について論じていた部分に、その解決の道を探ってみよう。

But man loses more and more his faculty for collective self-expression. Nay, the great development in collective expression in mankind has been a progress towards the possibility of purely individual expression. The highest Collectivity has for its true goal the purest individualism, pure individual spontaneity. But once more we have mistaken the means for the end . . . (“Democracy” 702)

本来「集団性を最高度に極めるということは、最終的には最も純粋な個人主義、純粋な個人の自発性に行き着くものである」という、一見矛盾するロレンスのこの言説は一体何をいわんとしているのか。集団性と個人性とは、果たしてロレンスのいうように、同じ土俵で語れるものなのだろうか。

ここで、いかにして「個人」がその独自性やアイデンティティを獲得できるのか、そのメカニズムを考えてみよう。人間がこの世に独りしか存在しなかったら、と仮定してみる。そのような存在が果たして自己のアイデンティティといったものを問題化できるだろうか。それが可能となるのは、他者が存在し、その他者との交流を通じて相互の違いが顕現化する時なのだ。蛇の存在を知り、草花の存在を知り、大気の存在を知り、そうすることで、人間としての自己を知る。また男性（女性）の存在を知り、女性（男性）としての自己を知る。隣に存在する友と深くつき合うことで、彼（女）との違いが見えてくることで己を知ることができるのだ。「知る」という言葉を頻出させたが、ここでいう「知る」とは、ロレンスによれば「分離化によって知る」（「知的、合理的、科学的認識方法」）ことではなく、「一体化によって知る」（「宗教的、詩的な方法」）ことを意味しているのはいうまでもない（*cf.* PLCL 512）¹⁴。まさに、ロレンスのいう「ふれあい」の必要性である。かつて「ノッティンガムと炭坑地帯」（NMC（“Nottingham and Mining Countryside”））の中でロレンスが郷愁の念をもって描き出していた、「ふれあいといっていいほど親密な炭鉱夫どうしの交わり、「非常に真正かつ力強い」、「肉体的知覚や親密な一体感」こそが必要なのだ（*cf.* 136）。人間が自己の完全性を信じ、他を顧みることなく、孤立してバラバラに存在する限りは、むしろアイデンティティや個人性は見えてこそ、何よりもロレンスの求める「愛」は実現できないのである。以上のようなロレンスの主張は、個人性と集団性の両方の要素を具えた人間存在のあるがままの姿の追求である。

*

*

*

さて、「情熱的な愛と、他者との適切なふれあい」(*Apocalypse* 125)によってむしろ「個人」になれるのであれば、大いにその交わりを求めればいいのではないだろうか。しかし事はそう簡単ではない。というのも、ここに大きな問題——断片化してしまっている現代人の「結びつきの抵抗」という問題——が存在するからだ。

The Apocalypse shows us what we are resisting, unnaturally. We are unnaturally resisting our connection with the cosmos, with the world, with mankind, with the nation, with the family. All these connections are, in the Apocalypse, anathema, and they are anathema to us. We *cannot bear connection*. That is our malady. We *must* break away, and be isolate. We call that being free, being individual. Beyond a certain point, which we have reached, it is suicide. (125)

孤立することを「自由」あるいは「個人を保つこと」だと曲解し、結びつきに抵抗するようになってきてしまった「病的な」現代人が、個人を尊んだ本来あるべきデモクラシーに立ち至り、人間相互の愛を取り戻すためには、また、ロレンスが「ノッティングガムと炭坑地帯」(NMC)でいう「共同社会本能」(139)を再び取り戻すためには、どういう道が残されているのだろう。

ロレンスは、人為的なもの、観念的なもの、理想主義的なものをかなぐり捨てなくてはならないという。それは、「固定的で人為的な理想の支配から逃れ、自由な自発性へと解放される」(“Democracy” 713)ための闘いである。そのためには、キリスト教徒としての「偽りの立場」、民主主義者としての「偽りの立場」、そして個人主義者としての「偽りの立場」を放棄する必要がある。

We have to give up a false position. Let us give up our false position as Christians, as individuals, as democrats. Let us find some conception of ourselves that will allow us to be peaceful and happy, instead of tormented and unhappy. (*Apocalypse* 124-25)

しかしそれらを放棄するだけで問題が解決するわけではない。否、それを行動に移すこと自体が今のままでは困難であるともいえる。ジグソーパズルのバラバラになってしまったピースのように、人間同士がお互いに結びつく力を失い、観念的なものから脱却できない今、人間のみ眼を向けていたのでは埒が明かない。ではどうすれば「平穏と幸福を与えてくれるような自己の概念」を見出し繋がりを持つこと、つまり個人と集団の二律背反的な現代の袋小路状況から脱出することができるのだろうか。

ロレンスは以下の引用において、問題の在り処を更に明言している。

When I hear modern people complain of being lonely then I know what has happened. They have lost the cosmos. — It is nothing human and personal that we are short of. What we lack is cosmic life, the sun in us and the moon in us. We can't get the sun in us by lying naked like pigs on a beach. The very sun that is bronzing us is inwardly disintegrating us — as we know later. Process of katabolism. We can only get the sun by a sort of worship: and the same with the moon. By *going forth* to worship the sun, worship that is felt in the blood. Tricks and postures only make matters worse. (*Apocalypse* 30)

ロレンスはこのように、問題の根源に人間のコスモス（宇宙的大自然）喪失があるという。そして、「現在の弱々しい生活のけちくさい個人的葛藤」を逃れて、生氣あるコスモスへ眼を転じ、コスモスとの「生きた有機的關係性」（*Apocalypse* 126）を取り戻すことにこそ、人間と人間を結びつける鍵が隠されているという。「人間の思うようには制御されえない」（124）「偉大にして生氣あるコスモス」（27）との「ふれあい」こそが、人間を「生命的意識」（46）へと導き、更には独自の自己の発見へと導いてくれるというわけである。

それは機械的な結びつきではない。機械は「他のすべての自然物との生きた関係」を持っていないからだ（*cf.* “Aristocracy” 481）。『アポカリプス』の中で「死にゆく作家」ロレンスが「生そのものに対する信仰を篤くし」（*cf.* Ford 89）訴えたこと、それこそはまさに有機的で生命力に溢れた関係なのだ。¹⁵ そしてそれこそが人間が密かに求めているものなのである。

But the Apocalypse shows, by its very resistance, the things that the human heart secretly yearns after. . . . What man most passionately wants is his living wholeness and his living unison, not his own isolate salvation of his 'soul'. Man wants his physical fulfillment first and foremost, since now, once and once only, he is in the flesh and potent. (*Apocalypse* 125)

人間が本来宇宙的大自然の一部であるからには、人間は自らの内に外部の大自然の活力を取り込むことができる。実際、春の新芽に接した時に、身内から生命力が湧き起こってくるのを感じるという経験はよくあることだろう。こういった経験は、人間の内なる自然が、宇宙的大自然の相関物と呼応し、お互いに共鳴し合うからに他ならない。

コスモスとの「ふれあい」については古代人、あるいは異教徒がよく知っていたという。彼らと現代のキリスト教徒との大きな相違は次の点にあるとロレンスは説明している。

個人と集団の狭間で

Perhaps the greatest difference between us and the pagans lies in our different relation to the cosmos. With us, all is personal. Landscape and the sky, these are to us the delicious background of our personal life, and no more. Even the universe of the scientist is little more than an extension of our personality, to us. To the pagan, landscape and personal background were on the whole indifferent. But the cosmos was a very real thing. A man lived with the cosmos, and knew it greater than himself. (*Apocalypse* 27)¹⁶

コスモスとの関係におけるこのような相違を認識していたからこそロレンスは、「黙示録」前半の異教徒的要素に対して好意を示すのだろう。¹⁷ しかし、コスモスとの異教的一体感あるいは「ふれあい」を、我々現代人が失ってから久しい、というのも事実である(*cf.* *Apocalypse* 101)。これこそ「我々の最も切実な悲劇」(27)なのだ。

自己の存在を身に引き受け、他者との有機的な連関をも身体的に実感できる個人に到達するために、また、子供のような「天真爛漫さ、あるいは純真さ」を取り戻した「真の個人」(ICSC 761)になるために、今必要なのがコスモスとの直接体験であるというのであれば(*cf.* DA 298-99)、それを求めればよいではないか。そこでロレンスは『アポカリプス』の最後でこう呼びかける。

What we want is to destroy our false, inorganic connections, especially those related to money, and re-establish the living organic connections, with the cosmos, the sun and earth, with mankind and nation and family. Start with the sun, and the rest will slowly, slowly happen. (126)

まずは「我々に義理立てして消滅したりはしない太陽」(*Apocalypse* 124)のもとに出ていき、身を委ねてみよう。そうすれば、生のネットワークの中でかけがえのない自己の存在を認識し、やがては生き生きとした生命圏の中で、人間は大自然と、人類と、国家と、そして家族との絆を打ち立てることができるだろう。それぞれが「生きた膜組織」(ICSC 761)によって結ばれた絆を。

結び

「個人は愛し合えない」をキーワードとして、本稿ではこの提言の根幹に横たわる個人と集団に関わるロレンスの捉え方を追及してきた。その際、これら二つの人間存在の在り方をキリスト教とデモクラシーの視点で検討することで、愛の不毛性の原因を突き止め、その状況から

の脱出の道を主に『アポカリプス』のロレンスの言葉を手がかりに探ってきた。D・ラチャペル(Dolores LaChapelle)が指摘するように『アポカリプス』は「『黙示録』についての注釈書としてはほとんど何の価値もない」(172)かもしれない。しかし飯田武郎氏が述べる通り、むしろそれは「人間同士の断絶という現代の問題と、その状況を克服する方法をより広い視野で」議論したものであり、そこでのロレンスの主張「崇拜の念を持って、太陽との生きた関係を築くことの必要性」(125)は傾聴に値するだろう。¹⁸

人間は本来人間同士の繋がりを求めて生きる集団性を具えた存在である。そのため太古の時代にあっては、見えないコスモスとの有機的な結合の中で、人間同士も繋がっていた。しかし一方、その集団性ゆえに、人が集まり増えればどうしても権力志向や上下関係が生じ、人間はお互いに愛し合う関係を築けない。それは、とりわけ人間が智恵を身につけ、観念的になり、文化や文明を発展させ始めてからの著しい現象であるといえよう。そこで人間はイエスをはじめとして、「個人」を志向し始めた。個人主義を標榜し、デモクラシー社会における人類愛を求めたのだ。しかし、イエスの教えはどのように受け取られ、また、現実のデモクラシー社会の中では一体何が起きているのか。

よくよく考えてみれば、個人を重んじるキリスト教の、とりわけイエスの教えもまた、ロレンスにいわせれば観念に基づいた人間の理想追求であり、人間を締めつけるものなのかもしれない。当然の結果として多くの人間は結局はイエスの教えを本能的に拒否せざるをえないのである。

デモクラシーの概念もまた、その本来のあり方 究極の集団性の中にあって個を生かすにそって具現化されるどころか、現代にあっては徒に観念的、また理想主義的になり、そのために「墮落」してしまっている。人間は架空の観念の操り人形になり下がり、むしろアイデンティティを喪失し、物質主義的で所有欲の権化になり、徒に嫉妬をかきたてられ、断片化を余儀なくされている。このようにバラバラの断片になり、孤独に喘ぐ状況にあって、しかるべき人間関係が、愛が築けるはずがない。¹⁹

現代人に果たして救いはあるのだろうか。ロレンスも「個人」を重んじていたことは周知の事実である。しかしながら『アポカリプス』において彼は、集団的存在であることを免れえない人間存在の事実眼に目を向け始めている。²⁰ そのような人間に対して、イエスのように「個人」であることを強要しても、また近代デモクラシーの概念で、「個人」であることを強制しても、結局は生命を持たない機械の部品のような断片になり下がってしまう状況は既に見てきた通りである。ロレンスは人間本来の在り方を思い、それを現代に生きる人間の在り方と付きあわせたと時に、個人主義の誤謬を嗅ぎ出していたのだ。

そこでロレンスが最終的に求めたのは、大きな意味での集団の中に在る独自の「個人」の追

求だった。ともすると「けち臭い」ものになりがちな今日の個人主義の問題を真摯に受け止めよう。現代人が本来の愛を今一度獲得するために必要なのは、機械的で孤独に喘ぐ「個人」ではなく、全体と一体化しつつも、ペルソナを脱ぎ捨て、かけがえのない本来の独自性を保った「個人」、コスモスとの一体感から得られる、生命主義的、有機的繋がりに満たされた「個人」なのである。人間が「個人」として存在することに関心を持ち続けてきた作家ロレンスが、人間愛の不毛性を嘆き、最終的に到達した先は、より大きな人間の概念、そして愛の概念であった。それは、機械的な結合ではなく、大自然の中における生命力溢れる有機的な人間相互の繋がりであった。

最後に、ロレンスが希求する状態をより深く脳裡に刻みつけるためにイメージを用いてみよう。人間を表すのに本論で既に用いた二つのイメージ ジグソーパズルと機械 がある。ロレンスが求める人間関係、あるいは人間と周囲の関係は、バラバラになってしまったジグソーパズルのピース一つひとつが、本来あるべき場所に収まり、一枚の絵を構成するイメージなのだろうか。あるいは、バラバラになってしまった機械の部品一つひとつが、本来あるべき場所に位置し、機械が作動するイメージなのだろうか。

いずれのイメージも確かにバラバラに解体されてしまった存在が、全体性を取り戻すという意味では格好のイメージになってはいる。しかし、両者のイメージには一つの影がつきまとっている。ジグソーパズルのピースを結びつける人工的な接着剤の存在、あるいは機械を動かすための人為的な操作の存在である。こういった人工性、人為性をロレンスはどれほど忌み嫌ったことか。人間同士の本来の関係、あるいは人間とコスモスとの有機的な関係を絶ったものこそが、まさに人工性あるいは人為性、とりわけ知の存在だったのだ。

In parenthesis let us remark that the very ancient world was entirely religious and godless. While men still lived in close physical unison, like flocks of birds on the wing, in a close physical oneness, an ancient tribal unison in which the individual was hardly separated out, then the tribe lived breast to breast, as it were, with the cosmos, in naked contact with the cosmos, the whole cosmos was alive and in contact with the flesh of man, there was no room for the intrusion of the god idea. It was not till the individual began to feel separated off, not till he fell into awareness of himself, and hence into apartness; not, mythologically, till he ate of the Tree of Knowledge instead of the Tree of Life, and knew himself *apart* and separate, that the conception of a God arose, to intervene between man and the cosmos. (*Apocalypse* 101)

人間は知恵の木の実を食べてしまったからこそ、有機的な関係性を失ってしまったのだ。ここでいう知とは、ロレンスのいう「一体化」(「宗教的、詩的な方法」)によって得る「知」ではなく、「分離化」(「知的、合理的、科学的認識方法」)によって得る「知」であることは先に触れた通りである。このような知ゆえに人間は、これまで述べてきた理想や観念を形作ってきた

のだ。そのような人為的なものと関係のない生命的、有機的な繋がりこそがロレンスの求めたものだったのである。ロレンスの希求するイメージはまさに次の引用に見出せる。

I am part of the sun as my eye is part of me. That I am part of the earth my feet know perfectly, and my blood is part of the sea. My soul knows that I am part of the human race, my soul is an organic part of the great human soul, as my spirit is part of my nation. In my own very self, I am part of my family.(126)

ロレンスは、コスモスの中の「個人」を、人間の体の中の器官の一部や精神の部分に譬えて説明している。足や魂、あるいは眼は果たしてどこからどこまでが足や魂、あるいは眼なのだろう。それらは目に見えない人為の及ばない次元で絶妙に有機的に結びついている。また同時にこのイメージからロレンスの求める個と全体の関係性も明確に見えてくる。例えば足には確かに足独特の「アイデンティティ」がある。魂には、また眼にはそれら独自の「アイデンティティ」がある。しかもそれらは体全体の一部であり、他の部分と有機的に繋がっていてこそ、足としての、また魂、眼としての特殊な機能を発揮しうるのである。ロレンスが嫌った融解状態眼が眼としての独特の機能を失い、全体に解け込んでものではや眼ではなくなってしまう状態になってしまっただけは元も子もないのである。人体の相似イメージこそがロレンスの求めるイメージ 大自然の中で独自の生命体が、それぞれ有機的に繋がって共生している状態なのである。

洋の東西にかかわらず、現代人の多くは文明化の流れと共に、ロレンスが提示した問題と同様の問題を抱え込んでいる。民主主義的個人主義を高らかに謳う時代であって、個人がむしろ喪失してしまうという矛盾を暴露し、キリスト教社会にあって、その誤謬を批判する。社会や時代に迎合せず、常に真摯に現実に向き合い、鋭い感性でその問題点を暴いていく。そのようなロレンスの姿勢は、まさに今日でも、いや今日であるからこそますます必要とされている。

とりわけ「個人は愛し合えない」という彼のメッセージは、紛争が絶えない国際間の関係を考えるにあたり、また各国における、特に殺人事件等、人間関係の不毛性を証拠付けるような事件が頻発する現代の日本における人間同士の関係を考えるにあたり、まさに傾聴に値するものだろう。それぞれの国という部分同士がお互いに滅ぼし合うという戦争行為の内に、また、それぞれの人間という部分同士がお互いに他者を消滅させようとする衝動の内にはロレンスが論じる問題が潜んでいる。コスモスの内に在って成就できる「真の個人」同士の愛を人間間に、また国家間に打ち建てるために、ロレンスのメッセージに真摯に耳を傾け、太陽のもとへ飛び出せるか否か、それが問題なのである。

注

- 1 ロレンスの作品の『アポカリプス』(*Apocalypse*)との区別がつくように、聖書の“the Revelation of St. John the Devine”を表す時は「黙示録」と記した。
- 2 拙論(「D・H・ロレンスのポスト・フェミニズム的意義」)を参照のこと。“Cocksure Hen and Hensure Cock”の中で男女の愛に関してとりわけ性を区別することの必要性を説くロレンスの今日的意義を論じたものである。
- 3 『アポカリプス』といえば、ロレンスの文学や思想を理解するために重要であると考えられ、多くの批評家、研究者がこのエッセイに言及しているのは事実である(*cf.* 倉持 271)。ただ、それを大々的に論じるものがあまり多くはない中で、倉持三郎氏がロレンス以前の様々な「黙示録」研究に言及しつつ、それらとの比較やそれらのロレンスへの影響を踏まえた上で、彼の独自性について詳細に論じているので参考のこと(*cf.* 210-18, 271-84)。また、『アポカリプス』に、今日のエコロジー的発想の核ともなるような思想が見られることを指摘したアン・エラート(*cf.* Ehlert 24, 40, 42n, 45, 182, 184)やD・ラチャペル(LaChapelle)の著書も興味深い。
- 4 初期キリスト教には3人のヨハネがいたという。イエスに洗礼を施し、イエスの死後にも自身の宗派を創始し、長くその命脈を保つこととなったバプテスマのヨハネ。次に第四福音書と書簡とを書いている使徒ヨハネ。そして、ローマ帝国に対する宗教上の罪を着てパトモス島の獄屋に送られたこのパトモスのヨハネである。しかし彼はその後一定の刑期を終えて島から解放され、エベソに戻り、伝説によると非常に長寿を保ったということになっている。(*cf.* *apocalypse* 13)
- 5 ロレンスが子供心にその「不自然さ」故に嫌悪感を抱いていたというのは事実であるが(*cf.* *Apocalypse* 61) ここでは大人になり、「黙示録」を理解するようになってから抱いた嫌悪感を問題にしている。
- 6 トリアンディスも、長い人類の歴史を考えると「集団生活は、霊長類の動物にとって、明らかな長所がある」(86)と論じ、歴史との関連で見ても人間存在の集団性は本質的なものであると捉えている(*cf.* 11; see also 189)。
- 7 それは形を変えると弱いものいじめを初めとする他者への暴力という形で顕現化せざるをえないと大平章氏は述べている(*cf.* 231)。また人間が集団を形成すれば上下関係や権力関係は避けられないということを、ロレンス自身がイエスを引き合いに出して論じている。

Only when he is alone, can man be a Christian, a Buddhist, or a Platonist. The Christ statues and Buddha statues witness to this. When he is with other men, instantly distinctions occur, and levels are formed. As soon as he is with other men, Jesus is an aristocrat, a master. . . .

So it is! Power is there, and always will be. As soon as two or three men come together, especially to *do* something, then power comes into being, and one man is a leader, a master. It is inevitable. (*Apocalypse* 16)
- 8 トリアンディスによると、世界的に見て、「個人主義者は少数者であり、地球の全人口の

3割にも満たないかもしれない)(192)という。

- 9 従ってロレンスが例えば集団主義を強調するとしても、それはいわゆる党派や政治体制としての全体主義を唱えるわけでも、ナチスやKKKを想起させるような「極端な集団主義」(トリアンディス183)を擁護するわけでもないことを断っておきたい。世界大戦を経験したロレンスであり、実際それをテーマにした作品も無くはないものの、基本的にロレンスの関心は個人の内面や個人の存在の有り様にあったといえる。

10 See also “Love” 154 and FU 188. Cf. RP 694.

11 英語表現は “the identity” あるいは “the true identity” (cf. 706, 708)。

12 See also “Aristocracy” 483-4.

13 Cf. ICSC 761.

- 14 Cf. 拙論「知と血の十字架」。またロレンスは自分自身を「知る」ことに絡めて、自意識の問題について次のように論じている。

Paradoxical as it may sound, the individual is only truly himself when he is unconscious of his own individuality, when he is unaware of his own isolation, when he is not split into subjective and objective, when there is no *me* or *you*, no *me* or *it* in his consciousness, but the *me and you*, the *me and it* is a living *continuum*, as if all were connected by a living membrane. (ICSC 761)

- 15 ロレンスの生命主義は、次の引用にも見られる。

For man, the vast marvel is to be alive. For man, as for flower and beast and bird, the supreme triumph is to be most vividly, most perfectly alive. . . . We ought to dance with rapture that we should be alive and in the flesh, and part of the living, incarnate cosmos. (*Apocalypse* 125; see also *STH* 415)

- 16 最古の哲学者たちが嫌忌した、「新しい宗教」の特徴の主なるものとしてロレンスは次の2点を挙げている。① 個人的な性格 ② コスモス喪失 (cf. *Apocalypse* 102)

- 17 ロレンスは、そういった世界へと誘われることを希求する (cf. *Apocalypse* 26-7)、「ちっぽけで個人的」な生のしがらみから自由になり、「生き生きとした大いなるコスモス」への回帰を望むロレンス。彼はそういった「コスモス崇拜」の要素を垣間見させてくれる「黙示録」に感謝の気持ちさえ抱くのが良かった (cf. *Apocalypse* 31) もっとも異教徒、あるいは原初の古の種族(民族)に対するロレンスの気持ちが決して単純ではない点は理解しておく必要がある (cf. IE 99)。

18 See also LaChapelle 172.

- 19 トリアンディスが個人主義の問題として、「孤独感と社会的サポートの不足」、「疎外感やナルシスト的な自己陶醉に対して無防備にし、狭い自己関心の追求へと導く」点等を取り上げているが(187) こういった指摘は、まさにロレンスの懸念に繋がるだろう。

- 20 ロレンスは幼い頃、「全体は部分より大なり」ということをユークリッドに学んだ時のことを思い出している (*Apocalypse* 6) 。また、ロレンスが非個人的なものに関心を向け始めた時期を井上義夫氏は「1913年頃以降」と限定している (cf. 268)。

個人と集団の狭間で

Works Cited

- Lawrence, D.H. *Apocalypse*. Harmondsworth: Penguin Books, 1977.
- . "Aristocracy." *Phoenix II*. Ed. W. Roberts & Harry T. Moore. Harmondsworth: Penguin Books, 1978.
- . "Cocksure Hen and Hensure Cock." *Phoenix II*.
- . DA ("The Dragon of the Apocalypse by Frederick Carter"). *Phoenix: The Posthumous Papers of D.H.L. 1936*. Ed. Edward McDonald. New York: The Viking Press, 1968.
- . "Democracy." *Phoenix*.
- . EP ("Education of the People"). *Phoenix*.
- . FU("Fantasia of the Unconscious"). *Fantasia of the Unconscious and Psychoanalysis and the Unconscious*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1977.
- . ICSC ("The Individual Consciousness v. the Social Consciousness"). *Phoenix*.
- . IE ("Indians and an Englishman"). *Phoenix*.
- . "Love." *Phoenix*.
- . NMC ("Nottingham and Mining Countryside"). *Phoenix*.
- . PLCL ("A Propos of *Lady Chatterley's Lover*"). *Phoenix II*.
- . RP ("The Reality of Peace"). *Phoenix*.
- . STH ("Study of Thomas Hardy"). *Phoenix*.
- . WNM ("Why the Novel Matters"). *Phoenix*.
- Ehlert, Anne Odenbring. "There's a Bad Time Coming": *Ecological Vision in the Fiction of D.H.Lawrence*. Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis, 2001.
- Ford, George H. *Double Measure: A Study of the Novels and Stories of D.H.Lawrence*. New York: The Norton Library, 1965.
- Iida, Takeo "D.H. Lawrence and Akiko Yosano: Contemporary Poets of Human Touch and Cosmic life." *D.H.Lawrence: Literature, History, Culture*. Ed. Michael Bell, Keith Cushman, Takeo Iida, Hiro Tateishi. Tokyo: Kokusho-Kankokai Press, 2005: 111-31.
- LaChapelle, Dolores. *D.H.Lawrence: Future Primitive*. Denton: Univ. of North Texas Press, 1996.
- Ohira Akira. "On Western Civilization." *D.H.Lawrence: Literature, History, Culture* : 225-35.
- 井上義夫. 『地霊の旅』評伝D・H・ロレンスIII. 小沢書店, 1994.
- 石見 尚. 『農系からの発想 ポスト工業社会にむけて』. 日本経済評論社, 1995.
- 倉持三郎. 『D・H・ロレンスの作品と時代背景』. 彩流社, 2005.
- 田部井世志子. 「知と血の十字架」. 『緑と生命の文学 ワーズワス、ロレンス、ソロー、ジェファーズ』. 福岡ロレンス研究会編. 松柏社, 2001.

田部井世志子

- . 「D・H・ロレンスのポスト・フェミニズム的意義」. 『D・H・ロレンスと現代』. 国書刊行会, 1995.
- トリアンディス, H.C. 『個人主義と集団主義 2つのレンズを通して読み解く文化』. 神山貴弥他編訳. 北大路書房, 2002.
- 福田恆存. 「まえがき」. 『現代人は愛しうるか アポカリプス論』 by D・H・ロレンス. 筑摩叢書47. 筑摩書房, 1975.